

アンコール文化遺産保護に関する共同研究

プノンベン西郊外の、ポチェントン国際空港を飛び立ったカンブチアエアラインの双発機は、東南アジア最大の湖であるトンレ＝サップ湖の上空を飛行し、約45分でアンコール観光の拠点都市シェムリアップ空港に到着する。滑走路に近づくにつれ、機の前方には西バライの広大な水面が広がり、旋回し始めた機の右手には、密林の中に、アンコール＝ワットの尖塔がわずかに先端を見せる。アンコール文化遺産の調査は、いつもこの光景から始まる。

この地に最初の都城を建設したのは、アンコール王朝第4代の王ヤショヴァルマン1世、9世紀末のことである。その後、代替わりに伴う遷都を経ながらも、15世紀にアンコール王朝が崩壊するまで、広大な都城が維持された。今見る都城と寺院は、12世紀から13世紀前半に整備されたものが多い。

文化庁では、平成5年度から、アンコール文化遺産保護に関する共同研究を開始した。具体的には遺跡探査・写真測量・石像建造物等の劣化対策・発掘技術・修復技術及び保存科学・広域遺跡整備の6点の重点項目についての共同研究をめざしている。

具体的には、現地への研究員の派遣と、カンボディア研究者の招聘が中心の事業となる。派遣事業においては、初年度ということもあり、まず現地の状況を把握するとともに、カンボディア王国の文化財保護行政組織についての現状認識を目的とした調査活動を行った。まず11月に予備調査として3名を派遣した。文化省関係者と会談を行い、共同研究の主旨や方法を説明した。3月には現地調査として4名を派遣した。現地を視察するとともに、気象データの部分的な収集も行った。同時に、上智大学が行っていた発掘調査に参加した。

招聘事業では、4名の研究者を1月22日から3月11日までの50日間にわたって日本に招き、埋蔵文化財センターを中心に研修を行うとともに、広域遺跡整備の状況について、国内各地の視察を行った。事業の進展に伴い、7月と2月に検討委員会を開催し、結果の報告、事業内容の検討等を行った。

計画は緒についたばかりであるが、3月の調査時には、招聘を終えたカンボディア研究者の方々にいろいろな便宜を図っていただくなど、共同研究の成果は、徐々にではあるが、目に見えるものとなりつつある。このような文化面での援助事業は、短期間ではなかなか目立った成果を上げにくい。今後本共同研究を地道に進めていくことによって、アンコール文化遺産の保護修復の進展と、技術の向上に何らかの貢献をすることができるであろう。

(杉山 洋)